ラオスのこども通信

64号
2015年7月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 地域図書館、第1号、第2号オープン！ ▶P.1
- はじめる・つながる・つくりだす［2015.3-2015.6］
  ラオス発 ▶P.2　日本発 ▶P.3
- みんなでボランティア ▶P.4
- 勉強会報告 ▶P.4
- メコンのほとり「遊」 ▶P.4

写真の説明はp４をごらんください。

地域図書館、第1号、第2号オープン！

「このトマトの本、借りていいのかい？」「法律の本をみたいんだけど、どこかにある？」
500冊余りの本を前に、興奮しながら本を手に取る村の人たち。雑誌の写真を見ながらきゃっきゃっとおしゃべりする若い女性。
ひとり小説を読みはじめ、すでに本の世界に入り込んでいるおじさん。
こんなにも本を受け入れるとは思っていなかった私にとって衝撃的で、地域図書館の可能性、広がりを強く感じさせる光景でした。

幅広い人々が図書に高い関心

2015年5月、当会は地域図書館の第1号と第2号をヴィエンチャン県サナカム郡で開きました。これは、「学校図書室の地域への展開事業(*)」として、従来の学校の図書活動にとどめるのではなく、村の人々とともに運営する地域図書館へと広げる、新たな挑戦です。

5月11日にノンサワン村、5月13日にナーパーファー村でオープン。どちらの村も集会場(といっても、屋根と壁が一部あるだけのミーティングスペースと、倉庫になっている小さな部屋が2つあるだけですが)の倉庫の一つを図書館とすることになりました。

ノンサワン村の開設式は、村人44人と小学生30人が参加。式典中は皆静かでしたが、研修での作業は賑やかで、本や雑誌をゴザの上に並べると、上述の光景が繰り広げられました。蔵書確認作業は、本を見慣れていないため、タイトルがどれなのかを確認するのに時間がかかりましたが、スタンプを押したり、図書カードを裏表紙に付けたりは、おしゃべりしながらもてきぱきと手を動かす女性たちの手際の良さに、ラオス事務所のスタッフも驚きました。

占いの記事に盛り上がる

図書館の管理は、担当する人を事前に選び出してもらいました。ノンサワン村は長老や役所を退職した人など男性4人と近所で雑貨店を営む女性1人の計5人。ナーパーファー村は農業を営む若手を中心に男性4人、女性2人の計6人です。学校での研修よりスムーズに進むと、ベテランの国立図書館職員も感心していました。

村の倉庫を図書館に

字を書くのは苦手だからと、図書カードの記入作業には及び腰だったり、貸出の手順を覚えるのも苦手で、ずっと不安そうにしていた女性担当者がいました。しかし、研修中に本を借りに訪れた人に、利用の仕方を説明したり、親子連れを絵本コーナーに案内したりと、しっかり図書館スタッフとしての役割を果たしていました。

(赤井朱子／東京事務所)

法律書をじっくりと読む

ラオス発

村の図書館は村人による自主運営で

早朝開館でいこう

書棚に本を収める図書館担当の村人

2015年5月、地域図書館の研修2日目は図書室運営について、担当の村人が話し合いました。開館日について、当会スタッフは、自分たちで実施可能な形を考えるよう促します。

「読みたい人がたくさんいるから毎日開くのがよい」、「田植えの時期は、それは無理」など、話し合いは白熱。結論は、ノンサワン村では、月水金の朝7時～8時にオープン。加えて、仏教行事のあるワンシンの日は、仕事に出ないので長めに開ける。貸出は、1人3冊まで、1週間で返却としました。一方のナーパーファー村は、月曜～金曜の朝7時～8時半にオープン、1人2冊までで1週間となりました。また、図書室内では飲食はしないというルールも決めていました。

さらに14の地域図書館を開設

当初は、こちらが期待するほど村人は読書をしないのではと予測しましたが、うれしい誤算でした。農業、法律、小説、絵本、歌詞本、雑誌など思い思いに本を開く姿がたくさん見られました。ある若者は壁に貼った地図をくい入るように見ていました。スタッフが村の場所を指し示すと、首都までの道のりを確認したり、近隣の地名を確認したりと、しばらくはそこから離れようとしませんでした。

読む機会がなかっただけだと実感するとともに、図書＝情報にアクセスする機会を提供することの重要性をあらためて感じました。重要なのは開設後、村人の手でしっかりと運営されるようサポートしていくことです。

「今回の2村は、当初から大変積極的でした。この事業は全部で16ヶ所あり、続く14の村がすべて同様というわけでなく、それぞれに合った取り組みが必要です」と、ラオス事務所スタッフ。村人とラオス・スタッフの活躍にご期待ください。

(*)JICA草の根技術協力事業による事業

甥っ子と絵本を楽しむ

NGOとの連携で学校図書室を開設

筏に車を乗せてロープを引っ張って移動。カムアン県サバンファイ郡の小学校に本を届ける道中での一コマです。NGOのワールドビジョン・ラオスの活動地で、同団体が進める地域開発と連携し、2015年4月、同郡のナーソーイ小学校に図書室を開設しました。

ラオスの小学校の抱える課題に留年・退学があり、教育の質や学校の魅力の低さ、家庭の経済状況など様々な理由が絡み合っています。前者の改善を図るのが当会の学校図書室であり、後者に関与するのが地域開発の収入向上などの取り組みです。両者が手を取り合うことで、子どもたちが小学校を無事卒業できる環境づくりに、より貢献するでしょう。　（セン／ラオス事務所）

新事業スタート

「中等学校の図書館整備事業」（外務省・日本NGO連携無償資金協力）が2015年3月から始動しました。詳細は次号でお届けする予定です。

＜出版プロジェクト＞

『トゥッククック兄さん』

作：カムタイ・パイパチャン
絵：アピシ・スパボンタイ
部数：3,500部　支援：学習院女子大学

カムアン県クーンカム村の人々が、その地の豊かさの起源を語り継いできた民話です。今もお年寄りが子どもに語り聞かせています。

昔々、ある男の子が光る黒石を食べると、巨人になりました。お坊さんは、その子をトゥッククック（巨人）兄さんと呼び、農民のために岩山を切り開いて田を作り、水路を引くよう言いました。巨人はその通りに田を耕しましたが、豚が田を荒らすので、穴に隠れて豚を撃つと、その銃弾が岩にあたり、洞窟が出来ました。水路は川になり、魚も獲れ、現在、クーンカム村は食べ物が豊富です。美しい洞窟や、森は観光地として有名になりました。

この作品は、2014年の「ラオスの各民族の若者のための出版研修」で作られたものです。

『ビニール袋の旅』

作・絵：アーリーナー・アーパイワン
部数：3,500部
支援：株式会社すかいらーく
（500部は当会資金で印刷）

ビニール袋が旅をしながらゴミ問題を中心に環境について考えるお話です。

ある男の子が肉まんを買い、そのビニール袋をゴミ箱に入れずに、ポイ捨てしてしまいました。袋は風に乗って飛んでいき、自転車をこぐ男の子の顔に覆いかぶさり、前が見えなくなった男の子は転んでしまいました。袋は謝ると地面に落ち、今度は歩いていたおばあさんの足を滑らせ、転ばせてしまいました。袋は謝りながらこう思いました。「僕はどうすれば、もう誰も傷つけずに済むだろう？」

この作品は、2013年にラオスでおこなわれた絵本コンテストの入賞作です。

日本発

ラオスフェスティバル2015

2015年5月23(土)・24(日)に東京・代々木公園で開催された「ラオスフェスティバル2015」に出展しました。今年で5回目となるこのイベントは、活動の展示や物販に加え、多くの人が立ち寄る飲食ブースも盛況で、大変盛り上がります。今回は物販ブースに加え、初めて飲食ブースにも出展しました。

私が今回初めて担当した物販ブースでは、前回のレイアウトも参考にしながら、いかにして多くの方々に当会のブースに興味を持ってもらえるか考えて迎えた二日間でした。たくさんの方が当会出版の絵本を手に取り、さらにスタッフと話し合う場面も見られました。また、ラオスに何回か行かれたという方もおり、ラオスの認知度が高まっていると実感出来ました。

前回出展時に行われた人形劇などの実演が出来なかったので、絵本を手に取り見て頂くだけでなく、ラオス語を聞いて触れる機会を作っていけたらなと思いました。（古谷理恵／インターン）

インターネットで呼びかけ、出版が実現！

消えゆくことへの危機感から「少数民族の文化を継承する作品出版」を企画し、2014年末から募金を呼びかけていました。目標の50万円に届かない分をなんとか集めたく、当会初の試みとしてクラウドファンディング（インターネット上での資金調達）に挑戦しました。

募集期間40日間という設定の中で、facebookやメールなどSNSを中心に、さらにはイベント会場などで呼びかけ、会員や初めての方など幅広くご支援をいただくことができ、35万円の目標に対して、それを上回る42万5千円が寄せられました！当初の予定2,000部を2,250部に増やして出版し、より多くのラオスの図書室などに届けることができるようになりました。

（菊地美玲／東京事務所）

「世界一大きな授業」

未だ学校に行くことができない子どもは世界に5,780万人、読み書きができない大人は7億8,100万人と言われます。2000年に日本を含む世界164か国が2015年までにすべての子どもが小学校を修了できるようにするなどの約束をし、世界銀行やユニセフ、ユネスコなどとともにその実現に向けて取り組んできました。

「世界一大きな授業」は、その約束が果たされるよう、世界100か国以上で先生やNGO、子どもたちが教育の大切さに目を向け、だれもが教育を受けられるよう自国の政府にメッセージを送る活動です。2003年から毎年4～5月に実施してきました。

日本では当会など教育と子どもの支援を行うNGOが実行委員会となって、このための教材を開発して全国の学校などに呼びかけ、2015年は全都道府県の780校・グループ、72,463人によって「授業」が行われました。寄せられたメッセージは子どもたちとともに政府に届けます。また、国会議員が「生徒」、高校生が「先生」となって、日本政府の途上国への教育支援について再考を促す「授業」も実施しました。

2016年以降については、5月、韓国で130か国の政府代表と250のNGOによって会議がもたれました。まだまだ取り組みは続きます。

（森透／理事）

ピーマイ・パーティー2015

当会33回目の開催となり、参加者約120名でラオスのお正月を祝いました。

団体・企業からの指定プロジェクトの進行状況

◆株式会社ファンケル

「フェアトレードフーズ」寄付金による当会ラオス事務所併設図書館の運営を支援。

◆キヤノン株式会社

「チャリティブックフェア2014」収益金による「折り紙ワークショップ」の支援。調整中。

◆公益財団法人ベルマーク教育助成財団

学校図書室開設プロジェクト。新規図書室の開設を準備中。

◆株式会社すかいらーく

子ども向けラオス語図書5作品の出版。再版3作品と新作2作品のうち1作品は印刷完了、もう1作品は原稿の最終チェック中。

※敬称略・事業開始順。これらは記事掲載以外のプロジェクトです。
個人のみなさまからいただいたご寄付は別紙に記載していますので、ご覧ください。

みんなでボランティア

実践的に学び、「知ることの楽しさ」を感じます

諏訪小百合さん(青山学院大学)

私は、大学でNGOや国際協力について学ぶ中で、その勉強を机上に留めず、実際にＮＧＯの活動に携わってみたいと思うようになりました。その時、議員事務所や国際機関でのインターンシッ

表紙の写真

巨大な白いポリバケツは、学校で子どもたちが飲む水を入れてあるもの。下の方に蛇口があり、備え付けのコップで飲んだり、水筒がわりのペットボトルに入れたりと、休み時間には子どもたちが列をなしています。とくに暑かったこの日、バケツの水はすぐになくなってしまいました。すると、5年生（最上級生）の男子２人が大きな飲料水のタンクを持ち上げて、補充。重いタンクを高い台の上まで持ち上げるのは、かなり大変ですが、大人の手を借りることなく作業します。ひと仕事終えた後の男の子たちの顔は、ちょっと自慢気！
（撮影場所：ヴィエンチャン県サナカム郡ナーパーファー小学校）

3時間行ったパンビエンでは、昼間から日いるのをよく目にしました。民家からはだけで遊んでいます。
子どもたちが遊びやすい自然や公園はあり

ちの目の届く範囲で、遊んでいるように感じます。
都会で育った私も、小さい頃は、友だちとこっそり秘密基地をつくったものでした。もしかしたら、ヴィエンチャンっ子にも子どもだけの秘密の遊び場があって、大人には見えないだけなのかもしれません。

一方、首都ヴィエンチャンから車
差しの中で、子どもたちが川で遊んで
いぶ遠い場所でも、大人なしで子ども
ヴィエンチャンの町中は車も多く、